

高大接続研究

第2集

2009年度版

島根大学入試センター 編

挨拶 高大接続に期待する

入試センター長

教育・学生担当副学長 三宅 孝之

高大接続。日本では、漢字の省略語が多い。省略すればするほど、その使用、理解される範囲は限られていく。しかし、同時に、その省略語が、流行語として逆流し、流布し普遍性をもったりもする。言葉とは、そのようなものであろう。むしろ漢字の文字自体がもつ表意性は、音声的な文字より利便性が有り高いのかもしれない。

では、高大連携は、今、どの段階にあるのであろうか。別個の差違のある教育目的をもった教育機関である小中（小学校・中学校）は一貫教育など、私立学校を中心に、また島根大学教育学部附属「小中」学校のように、巷間に知られている。それらの「小中」は、義務教育課程でもあり、制度的な類似性を含め、連動性は高いものとして、その特徴がある。そして、今、「中高」一貫教育は、私立学校の設置・教育実績のみならず、今や地方自治体のレベルでも、公立学校の「中高」一貫教育が、新制度の創設を含め、正面から議論となっている。

全国レベルでの学力テスト実施によって、義務教育課程にある生徒の「学力」が、教育界、地方政治で問題視され、都道府県単位で、低位にあるとされた学校を抱える自治体、教育界は、学力向上の方策をとる試練に立たされている。ここには、学力、基礎学力、教育目的、教育行政、義務教育、教育権などという、キーワードを用いた論争すべき問題が横たわっており、現象と「事実」はリアルに見るとしても、深い議論が必要であり、これに一喜一憂し、情緒的な反応を示すにとどまるべきものではない。

この場合に、その余波は、大学進学率、また特定大学への進学率の議論にも及んでいる。中学校と高等学校（「高校」）の「中高」連携は、今や、島根県においても教育界において焦眉の課題となってきているといえよう。

「中高」の教育、そして、最後に登板したかに見える、「高大接続」は、まさに高校と大学との「接続」であり、また「連携」とも相違するものである。

高大間の連携（教育）は、従来から問題意識をもって論じられ話題とされる場面はあった。今日では、まずは教育界、高等教育分野ではあるが、解決を迫られ、現実の焦眉の課題となっていることに特徴がある。徐々にではあるが、「高大」は教育界を越えて、社会問題化してきている。

通商産業省が、大学教育に「社会人基礎力」養成を求める議論をしている（2006年）。この社会的要請に応えることと、大学教育がこの時代的・社会的要請に適合しようとする自体の問題性と適応困難性も生じている。その中で、大学は、改めて足元、自身を見るとき、大学（短大を含む）進学率の上昇（若年人口の過半数が高等教育を受けるユニバーサル段階）があり、社会構造的にみて大学入学定員と少子大学進学志願者の全入時代が到来し、その只中にある。この高等教育の機会を国民がもてることは、その実質的な条件整備を伴うならば、それ自体は好ましいことである。この現実、高校と大学が、多数の進学者と大半の入学受入れという、送り手・受け手の相互関係を客観的には太いものにしており、それこそが、高大接続の根本に据えられる出発点であり、根本問題なのである。

島根大学は、一方では、本研究報告書に示される入試センターを中心に、高校と大学とが共同で、高校における実践授業、高大接続の教育セミナー、高大連携教育の在り方を高校の進学等の担当教員と連携し合いながら実践的に模索している。また他方で、大学においては、教育開発センターを中心に、初年次教育（全学部）への授業参観等の機会を高校の教員の方々にも提供してきている。

高大教育接続は、（相互）連携としてさらに発展する契機をもち、またそのように展開している。大学で、高大接続が、入学前セミナー教育、入学後補完・初年次教育等の一貫性のある有機的な連携として、さらに高校との連携構築とすることがなお課題であることも示しておきたい。

「高大接続研究 第2集」刊行にあたって

2008年度版に続き、本センターの研究と実践の集録として「高大接続研究 第2集」を刊行するはこびとなりました。

2008年度から本センターの高大接続の事業を本格的に開始し、今年度は2年目を迎えました。本学の先生方はもとより、島根県・鳥取県を中心に多くの高校の先生方のご理解とご協力の中で、本センターが取り組む高大接続事業の形を作ることでできた1年だったと思います。

「第1章 実践研究」では、昨年度に引き続いて島根県立三刀屋高校及び島根県立江津高校、今年度新たに島根県立安来高校のご協力を得て、大学生が高校に赴き、大学をテーマとした授業をおこなった「授業『大学』」の実践について内容と実施状況、実施結果をまとめました。大学生との協調学習の中で高校生が大学進学に向けた進路意識をどのように変容させていったかをまとめた実践報告です。

「第2章 高大接続フォーラム」では、大学での授業参観、高校での授業参観、そしてフォーラムという3つの内容をもった「高大接続フォーラム」の内容、実施状況についてまとめました。今年度は本学の教育開発センターとの共催、各学部の協力を得て大学における初年次教育の授業参観を新たに実施したところです。またフォーラムでは、年間を通して高校の先生方と取り組んできた共同研究「島根大学個別学力試験問題解答状況から考える学力問題」の報告を行いました。中学校から大学まで中等教育と高等教育にたずさわる教員が、それぞれの教育段階を見通しながら、教育の第一線で何が起きているのか、そして協働することでどのような展望をもつことができるのか、追究してきた事例報告です。

本集録に掲載した研究と実践は、いずれも高校と大学双方の教員の協働によってなりたっているものです。これが「高大接続」の本質ではないかと思えます。大学教員の力だけで入学後の学生の力をしっかりと伸ばすことはできません。高校の教員の力だけで大学進学を見通した実りある進学指導をおこなうこともできません。校種、教育段階を越えて、高校生、大学生の“学び”の世界を高く、深く、広く、強くしていくことに、本集録が寄与することを念じています。多くの関係者の皆様方からのご意見やご感想をいただけますと幸いです。

2010年3月

島根大学入試センター副センター長 田中 均

目 次

挨拶 高大接続に期待する

島根大学教育・学生担当副学長 三宅孝之

「高大接続研究 第2集」刊行にあたって

島根大学入試センター副センター長 田中 均

第1章 実践研究 授業「大学」 2

第2章 高大接続フォーラム

第2章—1 大学での授業参観 15

第2章—2 高校での授業参観 23

第2章—3 高大接続フォーラム 28

あとがき